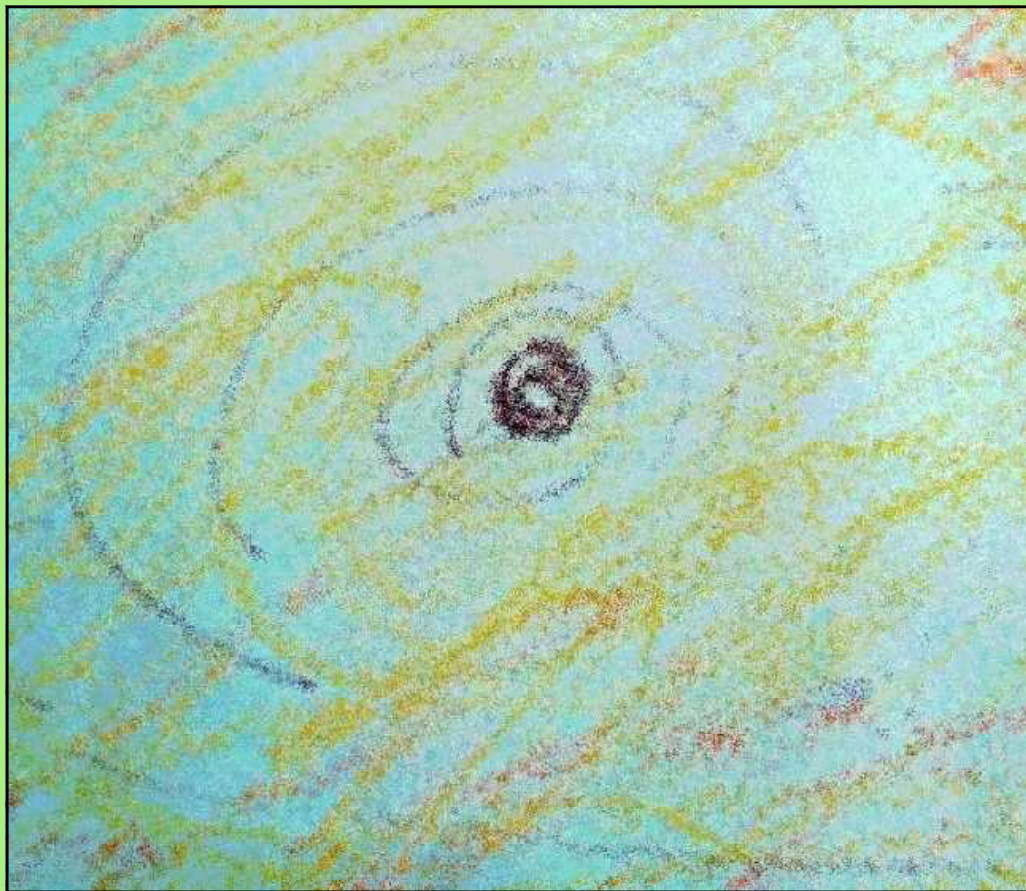


あじまりかん通信

あじまりかん友の会機関誌 *Newsletter from Fellowship for Ajimarikan Practitioners*



大元霊の渦巻き（福島県の前山治子さんが霊視されたもの）

Vol.2 (2018) 第2号

隔月刊 あじまりかん通信 通巻第2号 2018年3月15日発行

あじまりかんの渦一合気道の技は渦から繰り出される



図1：神業！ どうして自分が投げられたのか？



図2：第53回 全日本合気道演武大会より



図4：我が家の仏壇、下はベット用。
書棚の区画を仏壇として使用。



図3：我が家の神棚、ご神体は自然石。

■あじまりかん通信とは

あじまりかん通信は、世界で唯一の「アジマリカン」の専門誌です。

「アジマリカン」は大和建国時より日本に伝わる大神呪だいじんじゆと呼ばれる不思議な言霊ことたまです。

あじまりかん友の会は、大神呪「アジマリカン」の研究や行法の普及、「アジマリカン」実習者への情報提供や会員どうしの交流促進を目的として、2017年に設立されました。

「アジマリカン」とは、日本神話に登場する造化三神（創造神の本体に即した優れた概念です）の波動が顕在化したコトバナなのです。山陰神道やまかげなどの古神道では造化三神を大元霊だいげんれい、大元尊神だいげんそんしんなどと呼びますが、もう一つの神名「天津渦々志八津奈芸天祖大神あまつうずずしやつなぎあめのみおやのおおかみ」に、「アジマリカン」の本質が表されています。「アジマリカン」は、造化三神が渦巻きとなって宇宙を創造されるお姿が言霊となったもので、純粹な神のエネルギー波動が無条件で発動します。驚くべきことに、「アジマリカン」を唱えるとき、その響きの中に実神、すなわち、神の本体が顕現します。まことの神が波動として降臨するのです。その事実は、個人にとっても人類にとっても極めて重大な意義を持っています。誰もが「アジマリカン」を唱えることで、神の波動を体感し、神を直接認識できるといふことなのです。

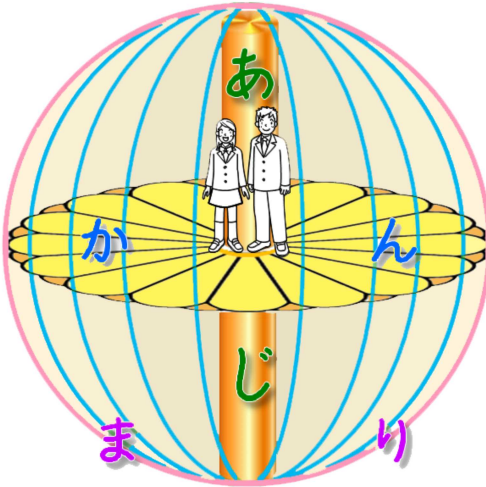
「アジマリカン」の一声で、人は一瞬にして神になるのです。そして、人はその時から神として生きてゆくこととなります。この事実こそ、斎藤が『アジマリカンの降臨』で伝えたかったことなのです。

あじまりかん友の会は「アジマリカン」を友とした人生を歩む「あじまりかん実践者」のための集いです。あじまりかん通信は、世の光・あじまりかん実践者に向けた情報発信を行います。

「あじまりかん」の図

◎全体として宇宙創造・国産みを表す。また、陰陽調和して生成発展する神の国を表す。

- ・ 中心の軸 …… あめのみはしら 天御柱。天之御中主神
- ・ 外側の球体…… 霊的な宇宙、三次元宇宙
- ・ 十六菊花紋…… 日本国（地球）・中心は天皇の座
- ・ 人物（男女）…… 我々人間。高御産巢日神、神産巢日神のペア。イザナギ、イザナミのペア



目次

あじまりかん通信とは	1
あじまりかんの渦(2)	3
読者のあじまりかん体験	22
あじまりかんQ&A	24
神仏の祀りと先祖供養について	27
当会への入会について	30
あじまりかん講座のご案内	31
編集後記	32

あじまりかんの渦 (2)

斎藤敏一

第二章 あじまりかんの渦の中心になる

◆「あじまりかんの渦」が生まれた瞬間

前章で、「2015年に『日本とはどんな国』を読んだ時には、実際に「あじまりかん」を唱えたと書いた。その記念すべき瞬間に、筆者の回りに目に見えない大きな渦が発生した。「渦巻く神のエネルギー場」が一瞬で形成されたのである。「渦巻く神のエネルギー場」というものができていることははっきりと分かったのだが、その時点ではそのエネルギー場の正体や性質はよく分からなかったのだ。筆者は約二年の時間と労力をかけて、必死にその正体を調べていった。調べるための手段は、拙著『アジマリカンの降臨』を執筆するという、自らの心身をフルに使っての方法だったということになる。

筆者が「あじまりかん」を唱えた結果として発生した、前代未聞の霊的なエネルギー場を説明するような資料はどこにも存在しない。私はその時、筆舌に尽くせないほど大変なものを身をもって体験して

しまったようである。

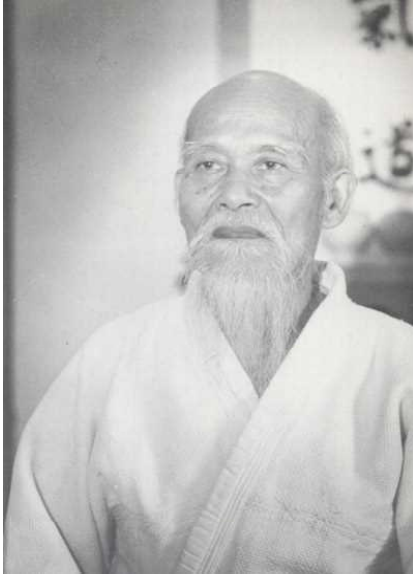
既に本誌の巻頭で「アジマリカン」という言霊の本体が大元霊Ⅱ造化三神であることを明かしてしまっているのだが、その意味は誰もが想像すらしていなかったものだった。この宇宙を創られた最高神が活き活きと働かれるお姿を表すものだったからだ。それは単に象徴的に最高神を指し示す言葉などでは決してなく、最高神そのものが実際に顕現されてその力を発動されている状態であったからである。これは人類史上かつてなかった究極の発見であると言っても決して言い過ぎではない。

この地上に存在するどのような文献にも、私の体験内容を正しく説明するものはない。いかなる宗教書や神秘学文献にも、掲載されていない体験なのだ。

だが、唯一の例外として、合気道開祖・植芝盛平翁の口述筆記書『武産合気』が存在する。その本は知る人ぞ知る、神の化身による合気道の神髄が語られている書物である。

すなわち、神の化身となった武道家・植芝盛平翁が、現在進行形で為し遂げつつある神のみ業のありようを、神ご自身の言葉で語った希有なる書なのだ。過去の如何なる宗教家や思想家の本とも異なり、神ご自身が遂行される産びの業を神の観点でそのまま語っているという前代未聞の書物なのだ。

植芝盛平翁の語る武産合気の道と私が語る「あじまりかんの道」との相違点は次のようなものだが、



合気道開祖・植芝盛平翁

植芝盛平先生口述

武産合気

高橋英雄編

『武産合気』

これは非常に重要なポイントである。

合気道においては植芝盛平翁自身が神さま⇨神人だったが、「あじまりかんの道」では「あじまりかん」という言霊が神さまであるということだ。主役はあくまでも大神呪「あじまりかん」なのだ。

つまり、私は表向きは普通の人間であり、神の言霊「あじまりかん」の取り次ぎであるということになる。「あじまりかん」そのものが神さまなので、私は神の化身になったり神の化身を演じたりする必要がない。その点が非常に便利かつ楽なのであったことなのであり、神界の大いなる神計らいなのだ。

植芝盛平翁の話になってしまい、熱が入ってしまった。ここで話を元に戻すことにしよう。

「あじまりかん」を唱えている私は、その瞬間神をまざまざと見ている状態に入っていた。私は人類共通の最高神を遂に発見したのである。

◆「あじまりかん」「こそが」「一厘の仕組」である

私は「あじまりかん」によって神を発見したのであるが、この体験は本質的に私一人だけのものでは

ない。なぜなら、誰でも「あじまりかん」を唱えることができ、「あじまりかん」を唱えた人は私と同様に神を見るからだ。大神呪「あじまりかん」を唱えるだけで、誰でも原理的に私と同様のことが体験可能なのである。

一言「あじまりかん」を唱えれば、そこに大元霊の大いなる渦が巻き起こり、瞬間的に神の世界が開けてゆくのだ。大いなる宇宙創造神の力を誰でもいたたけようになれるようになったのである。

筆者による「あじまりかんの真義」の発見という出来事は、言わば人類の歴史が始まって以来最大の奇跡であり、大方の人々が予想も想像もできなかった大いなる神の時代が開始されたのである。これはひとえに、「あじまりかん」こそがみろくの世を開くための神の最終兵器だからである。

拙著『アジマリカンの降臨』のプロローグで次のようなことを書いた。

あじまりかん体験…とびきり重大な秘密を語ろう。「あじまりかん」を唱えれば、そこに、「ズバリ神そのもの」が降臨する。これは（神霊）科学的メカニズムなので、誰でも体験できる。教祖も教会も経典も不要である。誰でも神とコンタクト状態となる。これを「接神」と呼ぶことがある。神の霊に浸され、神の力が発動した状態となる。

「ズバリ神そのもの（大元霊＝宇宙創造の大神さま自身）」が必ず降臨するからこそ、「あじまりかん」は神の最終兵器となるのだ。これを「一厘の仕組」（または「一輪の秘密」という。宇宙創造の大神が直接降臨される以上の神仕組はどこにも存在しない。

「あじまりかん」によって、遂に人類が長い間待ち望んできた「みろくの世」が開けたのだ。この日

本という不思議な国に秘められていた玉手箱から神宝（神法）「あじまりかん」が取り出され、誰もがその神宝を使うことができるようになったのである。

◆『霊界物語』に書かれた一厘の仕組とは？

大本の出口王仁三郎師の口述になる『霊界物語』に登場する一厘の仕組について、私が理解している一厘の仕組と比較検討しておきたい。

三五章には「一輪の秘密」について、以下のように書かれている。

「世界の終末に際し、世界改造のために大神の御使用になる珍^{うず}御宝^{みたから}である。しかしてこれを使用さるる御神業がすなわち一輪の秘密である」

また、三六章では「一厘の仕組」に関して次のように語られる。

「国常立尊は邪神のために、三個の神宝を奪取せられむことを遠く慮^{おもんばか}りたまひ、周到なる注意のもとにこれを竜宮島および鬼門島に



横になって霊界物語を口述中の出口王仁三郎師（大本ホームページより）

秘したまうた。そして尚も注意を加えられ大八洲彦命、金勝要神、海原彦神、国の御柱神、豊玉姫神、玉依姫神たちにも極秘にして、その三個の珠の対のみを両島に納めておき、肝腎の珠の精霊をシナイ山の山頂へ、何神にも知らしめずして秘し置かれた。これは大神の深甚なる水も漏らさぬ御経緯であつて、一厘の仕組とあるはこのことを指したまへる神示である」

霊界物語では、大神が神宝を使って遂行される御神業を「一輪の秘密」と呼び、その神宝を邪神から守るために隠されたことを「一厘の仕組」と呼んで、言葉の使い分けをしている。

一方我々は、一厘の仕組／一輪の秘密の正体が大神呪「あじまりかん」であるという回答を既に知っている。筆者が発見した「あじまりかん」という神宝の特徴や秘密解明の状況を霊界物語のそれらと比較してみよう。

		霊界物語		アジマリカンの降臨	
神宝		珍の御宝（三種の神器、正体不明）		あじまりかん	
誰が使うか		大神（良の金神）		天皇（当初）、一般人（現在）	
隠し場所		竜宮島、鬼門島、シナイ山		天皇行（山陰神道の伝承）、玉手箱	
隠した人		国常立尊		浦島太郎Ⅱアメノヒボコ	
解いた人		出口王仁三郎師		筆者Ⅱ今浦島太郎	
物語（神話）		霊界物語（創作）		浦島太郎（実話として伝承された）	

靈界物語に登場する珍の神宝と現実の神宝「あじまりかん」を比較してみよう。「珍の御宝」は「渦の御宝」、すなわち、「あじまりかん」の隠喩であることが分かる。「あじまりかん」の波動は渦を巻くだからだ。よって、「出口王仁三郎師の靈界物語は隠喩でしかなく真実ではない」ということだ。靈界物語の大部分は虚構に目くらまされた。そして、この事実もある意味では神の計画であった。

大神さまの神宝とは大神呪「あじまりかん」であり、普通の人間が「あじまりかん」を唱えるだけで大神さま（大元霊）がズバリ降臨されるのである。一厘の仕組とは、このように極めて簡単なお話だったのである。聖書の五倍の分量があると言われる「靈界物語全八巻とは一体何だったのだろう？」ということになってしまっているのである。控えめに言っても、靈界物語は真実とは無関係の与太話だと言いたいのではない代物であり、大神さまのみ心は全く別の所にあつたということになるのである。

真実は、日本人なら誰もが知っている浦島太郎（アメノヒボコ）その人が担っていたのである。「一輪の秘密」は我々の足下あしもとに遠い昔から横たわっており、私によって発見されるのを待っていたのだ。山陰神道とは関わりを持たない一人のプログラマーが、「あじまりかん」を唱えることによって、人類史最大の謎であつた「神の経緯の詰めの手」をあっけなく解いてしまったのだ。

この地上には、既に「とどめの神」である大元霊が事実（＝実体）として降臨されているのであり、すべての謎はその事実から解けてしまうのである。そして、誰でも「あじまりかん」を唱えるだけで、大神さまに大元霊の降臨を受けることができ、大神さまの心を直接知ることができるのである。

「あじまりかん」とはそれ程のものなので、この地球はあつという間に神の国に世界一家の地上天国の姿を現すことになっている、と言いつけることができる。

世界一家の地上天国を創つてゆく主体は、あくまでも我々、普通の人間である。普通の人間が「あじ

まりかん」を唱えるだけで、大神さまのみ心を遂行する力を与えられ、後戻りすることなく確実に神の国を実現してゆけるのである。

「あじまりかん」とはそういうものである。

そして、神の国創りの計画は、「あじまりかん」を唱える実践者「あじまりかん行者」たちによって既に開始されており、その輪が大きく広がりがりつつあるのだ。知るか知らずかには関わらず、神の国を創ってゆく中心的働きは「あじまりかん行者」たちに託されたのである。

◆「あじまりかん」の光で過去の体験を照らす

拙著『アジマリカンの降臨』の388ページ「弥勒降臨！ 直島訪問時の霊的体験」で簡単に触れておいたが、現時点でその日（1979年3月7日、二十五歳）の体験を振り返ってみると、改めて分かることがある。同著では、その時の意識状態を「弥勒意識」と表現したが、表現として正確ではなかったと思う。

私のその時の意識状態は、「あじまりかん」を唱えて神さま（大元霊）がこの身体の中に降臨された時と同じ状態であることが分かってきた。私はその日、確かに「聖霊の降臨」としか言いようのない体験をしたのであるが、ついに聖霊の正体が分かったのだ。

この「聖霊の降臨」とは、「大元霊」の波動に浸された状態だったのだ。この状態は二十一日間続いたのだが、当時は降臨した聖霊の実体が大元霊であるとは全く知らなかったため、適当に「弥勒意識」などという言葉で表現していたのだ。

私の三十九年前の見神体験は、間違いなく「あじまりかん」で降臨される大元霊の波動を受けている状態であった。そのことが分かるまでに、四十年近くの年月が必要だったのである。

今や、三十九年前の意識状態と現在のそれとが同一のものであると照合できた。

あくまでも自内証のことではある。だがその結果、私が「あじまりかん」と出会うことは、生まれる前から既に決まっていたことが明瞭に理解できたのである。

◆「あじまりかんシステム」を設計したのは誰か？

あなたが「あじまりかん」を唱えた瞬間、あるいは、「あじまりかん」を唱えようと思った瞬間、あなたを中心として神さま波動の渦が顕在化する。しかも、この仕組（メカニズム）は自動的である。

最近開催するようになった「あじまりかん講座」などの機会では、『あじまりかん』は神さまのシステムである」という意味のことを語ることが多い。

『あじまりかん』がシステムである」ということの持つ意味とは、このシステムを設計をした人（または神）が存在するということだ。この発想は、私がソフトウェア・エンジニアであったからこそなのだ。「あじまりかん」のような言霊システムを設計した存在とは一体いかなる人（または神）であろうかと考えざるを得ないのだ。

「あじまりかんシステム」には、最初から全人類・生きとし生けるものの全体的な救済という目標がプログラミングされている。具体的には、次のような仕組みが最初から組み込まれているのだ。

(1) スイッチ（＝入力）

「あ・「じ」・「ま」・「り」・「か」・「ん」という音素の並びによって、システムが動作する。大前提として、日本語の言霊という素晴らしいメカニズムが必要となる。言霊のメカニズムは大元霊の基本的な働き方＝所与の属性として、宇宙創生時点より日本語として存在していたものである。

(2) 動作（＝出力）

大元霊（最高神）の波動が顕在化し、「あじまりかん」を唱えた人が神となる。

(3) 利用者

「あじまりかん」と発声または思念することが可能な存在、すなわち、人間（または神）。

(4) 制約

「あじまりかん」と発声または思念できても、見かけ上常に同じ結果を生むとは限らない。それは、大元霊の産むすびと浄化の働きがもたらす結果が一人一人の人間に依存するからである。よって、既に浄まっている人（汚れが少ない人）はいわゆる「お蔭」という結構な体験をすぐにいただけるが、浄まっていない人（魂が汚れた人）は多かれ少なかれ痛みを伴う禊みそぎを受けてしまうことになる。

このように「あじまりかんシステム」は、常に同じ動作をするように設計されたシステムであるにも関わらず、「あじまりかん」で良い目をみる人と痛い目にあう人が存在する。これは、システムの問題

ではなく人間の出来の問題なので仕方がない。むしろ当然のことである。

以上のような「あじまりかんシステム」に関する考察より、このシステムを設計したのは人間ではなく大元霊宇宙創造神であることが明らかにになったと思われる。「あじまりかん」を唱えると色々なことが起こってくるが、当然ながら神のみ業であり人間業ではない。そのような素晴らしいシステムを人間が設計できたり創れたりするはずがないのである。

◆佐藤定吉博士の『日本とはどんな国』より

私達が生まれたこの日本という国には「あじまりかんシステム」が存在していた。これは、日本列島が生まれた時点で最初から仕組まれていたものであろう。

『日本とはどんな国』の著者・佐藤定吉博士は、同著「第二編 世界の灯明台 日本」の中で、次のようなご自身の体験を報告されている。少し長くなるが、その部分を紹介したい。

幼い時から私に悪い癖がある。一つの問題が与えられると、その一つが心にびったりとくっついて、夜も昼も忘れられない。幾日幾夜もそれがつづいた後大抵は早暁の頃である。半睡半覚の時に、「わかった！」と心の中に解けている。私には、こうした不思議な光のおとずれを経験する機会が多い。

私が学究生活に入って、前人未踏の研究と取りくみ、新発明の光をにぎり締めるチャンスは、この天の光との出逢いによることが大部分である。

私の科学研究による数々の発明、発見も、こうした靈的啓示によったものが多い。

「日本国家とは、どんな国であるのか。日本民族とは、どんな民であるのか？」

という問題が、上記のサクラメント駅頭から投げつけられ、その時以来、夜も昼もたえず私の「たましい」の中での追求の的になっていた。

そうこうするうちに、加州伝道の講演もだんだんと南下して、フレズノ市をすぎて、石油田で有名な都市ベーカーズ・フィールドの講演の一日であった。

ここは、太平洋沿岸に近い小さい町である。そこで午前中は、石油田の原産地を見、午後は太平洋の砂丘に似た、ひろびろとひろがり行く大陸の砂漠の中に立ち、しばし、われを忘れた心地になって遙か地平線の彼方を見つめていた。

思ひは、祖国日本に飛ぶ。

「ああそうだ。あの地平線の向うに、わが祖国日本があるのだ。

お！ 日本よ。

お！ 日本よ。」

と、しばし瞑目、深い祈り心に入っている時、私の靈は、日本の上空を翼をひろげて飛んでいるような感じになった。

すると、祖国日本が光明に照りかがやき、雲表から白光を放っているのが見える。それが、「一つの活き物だ！」との靈覚が来る。

まばゆいほどの白光にかがやく祖国の前に、他の世界の「くにぐに」はうすぼんやりした光にくもっている。

そして祖国日本が雲表の富士の霊峰だといえ、欧米諸国は、箱根、足柄の山々だ！

ああ、日本はこのようにすぐれた「霊の国」であつたのだ。祖国日本は、「全く一つの活きものであつたのだ！

わかつた！

『日本は、並々の国家ではない。一つの活きものであつたのだ。』

神の霊が盛られた国。神のいのちが、その活きものの「いのち」になっている国！

これが、日本であつたのだ！』

と、神の白光の中に引きあげられた祖国日本のすがたを私の霊は、じきじきに見たのであつた。「ここに日本の偉大さ、ここに日本の崇高さ、ここに日本が神国とよばれる所以があつたのだ！」と、理智を越えた霊的「さとり」が、私の心にひらけてきた。

「なるほどそうだ。日本以外の国々は人為によって造られた国であった。しかし、祖国日本は、天のいのちから生え出た一つの神の「枝」であった。国の真価は、その外形にはない。『国をつらぬく天の「いのち」が祖国日本の実体であるのだ！』そこに日本の世界に冠たる優



横山大観の「神国日本」

越性があるのだ。

『日本の「くに」は、天的「いのち」の国だ。日本は、天為の国。外国の諸国は人間のために組み立てられた国。日本は、神のためにわかされた国だ』

「そこに日本の崇高さ、偉大さがあつた。この崇高さ、この偉大さの前には、なるほど欧米の諸国も、東洋の他の『くに、くに』も、みな富士の嶺峰の麓にうづくまる箱根、足柄の山々であつたわい！」と心のすみずみまで、すき透つて私にわかつてきた。

これが、私の生涯において、始めてわからせられた『日本の真実のすがた』であつた。（引用終わり。太字、傍線は筆者）

以上が佐藤博士の霊覚に映つた神の国・日本の姿である。私が最初にこの一文を読んだ時には、『日本が神国である』と、ここまでハッキリと言い切つてしまつてよいものだろうか？」と、いささか心配になつてしまつた。

だが、大元霊の降臨を確認できた今では、「佐藤博士には少し遠慮があるなあ」と思ふのである。私と佐藤博士の「日本神国観」に関する立場が逆転してしまつたのである。

◆斎藤の「日本神国観」は佐藤博士以上に明確である

私も佐藤博士と同様、「日本は神の国である」という認識を持つのであるが、引用文中の「祖国日本は、天のいのちから生え出た一つの神の「枝」であつた」の部分に関しては意見が異なる。あるいは、

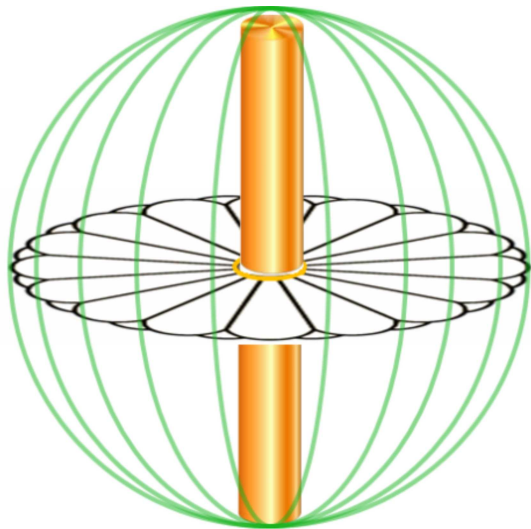
同記述に対して少し補足しておきたいことがある。以下に示すのは、拙著『アジマリカンの降臨』、「第二部 生命樹編」の一節（339ページ）である。

特に重要なのは、日本国家とは神から出た靈的実体、『日本とはどんな国』の著者である佐藤博士の言葉を借りれば、一つの活き物であった。説明はもちろん後付けである。『日本とはどんな国』に書かれていた佐藤博士の靈的日本体験とほぼ同一の体験であることが、現時点では理解できるのである。

筆者が現在の理解に達するまで一年近い時間が経過していた。靈的体験とは言っても、筆者の場合は見えたり聞こえたりするわけではなく、理念的な実体を直接認識するという体験が多い。靈的な体験中に、筆者の興味の対象となっている理念や概念の実体を直覚するという認識の仕方である。非常に内容が抽象的なので、その体験を言語化するのが困難なことが多い。

筆者の体験における「天皇の座」というものが、肉体人間である過去の天皇や今上天皇の存在と直結するわけではない。まして、天皇が神であるなどと言っているわけではない。日本国家の設計理念における天皇の座を理解したということだ。その点は誤解しないようにしていただきたい。

筆者は決して天皇崇拜者ではないし、歴史的存在としての天皇は常に誤り犯す可能性を持った存在であるし、必ずしも立派な人間ではなかったことを知っている。そして、天皇の座を中心とする日本国家の様相を、最も確に表現する言葉が「中心帰一」という言葉なのだ。その中心帰一の日本国家の形態が、来たるべきミロク世の地球人類の姿「世界一家の地上天国」の形態であることも、一瞬にして分かっていった。人類は世界一家の超々大家族となることに決まっているのである。



神の国と天皇の座のイメージ：

中心が天皇の座である。その座には神界直結の光の柱が立つ。天皇になった人間が神なのではなく、天皇の座が神界に通じているのだ。

筆者は夢で天皇の座に立ち、神界まで吸い上げられそうになった。自分の肉体と霊体をつなぐ霊線が切れそうになり、生命の危険を感じた筆者は途中で降りてきた！ 三十年余り前の夢の中での体験であるが、天皇の座には確かに昭和天皇がおられた。

あまりにも明瞭な夢だったので、今でも鮮やかに記憶が甦る。筆者は昭和天皇の体を通り抜けて光の柱を上昇した。この時、天皇とは本来どんな存在なのかが、自分の身体感覚として理解できたのである。

筆者が一時在籍していた生長の家教団の谷口雅春師が、禪の無門関解釈で、「拈華微笑（ねんげみしょう）」すなわち、釈迦から摩訶迦葉に一拈りの花をもって伝えられた真理は、上図のイメージが示す「中心帰一の原理」であると説いた。この講義こそ谷口師の真骨頂である。

これが宗教の極意であり、この教えだけで人類は救われる！ 生長の家の谷口師は、筆者に拈華微笑の教えを伝えたことで、その使命を果たされたのだと言える。

私がここで言いたいのは、「日本は大元霊によって設計され、この地球に設置された中心の国である」という事実である。地球が生まれる前に日本という国の理念が存在していたのである。

そして、日本という国が大元霊の国であるからこそ、日本には大神呪「あじまりかん」が存在するのである。

日本は「あじまりかんの国」なのである。

三種の神器以上の最貴最勝の神宝。それが日本に秘められていた大神呪「あじまりかん」であり、「あじまりかん」があるからこそ、正しく日本は神の国なのである。「あじまりかん」があるからこそ、日本という国は天壤無窮（天地とともに永遠に極まりなく続く）なのである。

このことを言ったのは後にも先にも斎藤だけであるが、私はこの事実を生まれる前から知っていたのだ。だからこそ、「あじまりかんの真義」を解くことができたのだ。日本に「あじまりかん」が秘められていた意味を正解した人間でなければ、このような発言はできないのである。

◆玉手箱こそが真実のアーク（聖櫃・契約の箱）である

今世界中で、行方が分からなくなっているアーク探しが行われている。アークとは、言わずと知れたモーゼの「契約の箱」のことで、聖櫃と呼ばれることもある。以下は、斎藤独自のアーク論である。

モーゼのアークは、異星人の技術供与によって作られた偽物の契約の箱である。私に言わせれば、モーゼのアークは本当の神とは無関係である。

理由は簡単である。本当の神は人殺しの箱（殺人兵器アークによって多くの人の生命が失われている

ことは、旧約聖書に書かれた事実である）などを人類に与えはしないからだ。

拙著『あじまりかんの法則』で、私はアークについて「浦島の玉手箱は契約の箱（アーク）だ！」と語った。人類は神の本当の宝物とはいかなるものか全く分かっていない。イスラエルの三種の神器、日本の三種の神器、いずれも神宝ではあるが、本物の象徴でありダミーではない。

本当の神宝とは、玉手箱の中身である大神呪「あじまりかん」なのだ。玉手箱の中身が「あじまりかん」であることは、拙著『アジマリカンの降臨』のエピローグの572ページ「アメノヒボコが『あじまりかん』を創唱した」で詳述した。

私の主張が正しいことは、近日中、ごく近い将来に明らかになるであろう。

なぜならば、多くの人が唱えはじめた大神呪「あじまりかん」によって、本当の神さま「大元霊」が降臨しており、大元霊が大きく働かれるようになってきているからだ。

本当の神さまは、すべての人・生きとし生けるものを活かし育みたまう。「あじまりかん」はまさにそのような言霊なのである。

人殺しの箱だったモーゼのアークなどとは全く異なり、「あじまりかん」は全人類を最後の最後まで活かし、育み、面倒みて下さるのである。

今や、日本には「あじまりかんの大渦、小渦」が無数に出現しており、地上天国の実現は目前に迫っているのである。

「第三章 あじまりかんの渦が働く仕組」に続く……

読者のあじまりかん体験

☆実践してなんぼの方が大事（柴田茂夫さん）

新年あけましておめでとうございます。

昨年は相模大野の講習会での貴重なお話、ありがとうございました。

講習会の時は、すでにあじまりかんを唱えて、2、3か月は経っていたかと思えます。

私だけではなく誰でもそうだと思いますが、不随意に湧き起る思考に入ってしまう、我を忘れたまま人生を生きてしまいがちです。

私は昔から、修業というほど肩肘を張ったものではないですが、思考や感情に気付き眺め続ける「俯瞰^{ふかん}」ということを意識してやってきました。

とは言え、やはり、つい不随意に生じてしまう思考やそれに伴う感情の中にはまり込んでしまいがちです。

このあじまりかんは、そうした俯瞰をやっている事が、やり易くなります。

不随意に生じてしまうものを、意識の操作だけで俯瞰し始めるよりも、言葉を用いる方が、言葉が取っ掛かりのツールなるといふか、やり易い感じます。また、不随意に生じてしまったものにはまり込んでいた自分と、あじまりかんを唱えている自分（俯瞰している自分）との違いも感じ易いです。

この俯瞰というのは、今までやって来たものは、意識セットの仕方であつたものがありまして。

まずは、仙道の書籍で紹介されていた「自観法」というものは、ただありのままに、例え不快なものでも、抑えたり目をそらせたりせず、ありのままに気付き続けるといふものですが、これはけっこう難しかったです。やはり不快なものには、それを忌避するこだわりを持ちがちです。

また、不快感というものも大切なものだという

意識セットでもって俯瞰していくやり方もありました。これは今でもやる事があります。

また、ホ・オポノポノも今でもやる時があります。これは、今ある自分はそれまでに自分が行ってきた結果だという意識、すなわち自己責任であるという意識セットを作り、その事によって傷つけてきた自分の中の幼い存在（インナー・チャイルド）に対して語りかけるような意識セットをして唱えるわけで、俯瞰法の一つとも言えるかと思えます。ただ、不快感を一時沈めるには結構効果的ですが、意識の作業として若干のステップを踏みますし、言葉も四つあるので少し面倒に感じる時もあります。

それに比較し、あじまりかんは、ただ一語で、意識セットもそれほど面倒な事がなく、ただ、何かの大きな存在にお任せするような感じでやればいいので、手軽にできる感じですよ。

この、俯瞰という事に関して、必ずしも正確な記述になっているかどうかは定かではありません

ん。微妙な事ですので…。

とにかく、そうしたこと、実践をしていたところ、講習会のご案内を頂いたので参加した次第です。

(中略)

今後まただひたすら唱えていこうという更なる動機付けを頂いたと思います。

日本神道の歴史的な由来とか経過とかはあまりよくわからないのですが、わからなくても唱えていけばいいということを斎藤様も著書や講習会でも述べておられますし、とにかく、今のところの思いは、知識よりも実践してなんぼの方が大事だろうという理解の仕方をしています。

あじまりかん友の会では、読者の方々のあじまりかん体験や感想を募集しております。
↓ tomonokai@ajimarikan.com

あじまりかんQ&A

Q 9月より1月31日でようやくアジマリカンを百万回唱える事が出来ました。(中略)だけどころな欲たかりな私ですがトドメの神は裏切らないです。二月からもカウンター片手に二百万回目指し唱えていきます。

質問があります。まだ渦巻きの光の様な物は見えませんか。早口で唱えたから見えないのでしょうか？ アドバイスお願いします。

A アジマリカン百万回達成おめでとうございませす。色々と体験を積み重ねておられるようで、素晴らしいことだと思います。

「まだ渦巻きの光の様な物は見えませんか」とのことですが、前山さんが霊視されたような渦巻きのビジョンは私も見たことがあります。私もずっと昔に百万回唱え終わってしま

すが、見たことはないのです。つまり、見えないのが普通だということになります。見える見えないは、あじまりかん行者の備えている条件次第だと思いますが、その条件というのはよく分かりません。

前山さんの場合は、多くの人に大元霊の渦巻くお姿は事実であることを知っていただくための、神さま側の理由があつたように思えます。

渦巻く光のようなものが見える見えないにかかわらず、二百万回達成を目指して、今後も「あじまりかん」を唱え続けてください。

Q 「あじまりかん」を唱えた時に、光の渦のようなものを見る人と見えない人がいるとのことですが、人によって結果が異なるのはどうしてでしょうか？

A この質問を良い機会として、霊能力の有無と

いう問題について正しい考え方をお話ししましょう。

結論から言うと、霊能力というものはあまり当てにはならないものなのです。どうして当てにならないかと言えば、**完全な霊能力というものは実際のところ存在しない**からです。

具体的に説明します。霊能力には、見える、聞こえる、感じる、といった五感に対応する感知能力が存在します。そのうちの最も基本的な能力は触覚に相当する部分であると思います。ですから、触感的な認識能力というものを基本として、見えたり聞こえたりという能力も存在しているわけです。

私は今まで、優れた霊能者や霊覚者であると世間で認められた人たちの言行を観察する機会がありました。しかし、どんな霊覚者であってもその霊能力は部分的な認識能力でしかなく、誤っていることも多いという事実を知っています。例えば、白光真宏会の五井昌久

師は、生前「霊覚者」と呼ばれ、絶大な霊能力を持っていると信じられていましたが、肝心なことが見えていませんでした。例えば、秋篠宮を「西郷隆盛級の魂だ」などと絶賛していました。が、とんでもない間違いです。

事実なので言ってしまうですが、秋篠宮は決して立派な魂ではなく、その反対の（邪悪な）本性の持ち主なのです。私には人間の霊位というものが必要に応じて分かりますが、秋篠宮が高級霊でないことだけは自信を持って言えます。その逆に、マスメディアが意図的に悪いイメージで印象操作することが多い皇太子は超高級霊に極めて立派な魂の持ち主です。多くの人はマスメディアが流しているイメージに流され、皇太子は余り立派な人ではないと思いつままされているのです。

生前、五井師はイエス・キリストをまるで近所の友人であるかのように、いつも話をしていく間柄であることをごく自然に語っていま

した。そういう人でも、秋篠宮の本性を見抜けていかなかったのです。

私はこのように、肝心なことが分からない霊能力なんて一体何の意味があるのかと考えざるを得ないような出来事を見聞きしてきました。要するに、霊能力などというものは非常に限られた制約の多い能力であり、過信することは禁物なのです。

霊能力が有効なのは、その力を他人のために役立てることが可能な場合のみと考えるべきです。

前山さんの例で言えば、多くの人に宇宙創造神が渦巻いて働かれる姿をイメージとして伝えることが必要だったという「神さま側の事情があった」ということになります。

私の場合には、霊の存在自体を感知する能力以外の霊能力は封印されており、使うことができませぬ。ですが、大元霊や神さまの存在を感知する能力があるお蔭で、読者の方に神

霊が実在することを自分の言葉で語る事ができます。この場合も、私の霊感知能力が他人に神霊の世界を説明するために役に立つからこそ、使用することが許されているのです。ですから、霊能力を持っている方たちは、その力が神さま側の事情で存在しており、他人のために使うためのものであることを再確認して下さい。その原則を破って、霊能力を自分だけ利益のために使うようなことは避けなければなりません。また、霊的に見聞きしたものを鵜呑みにはせず、自分の頭を使って意味を良く理解した上で、人のために役立てるよう心がけて下さい。

当会ではいつでも、読者の方々からの質問を受け付けております。ご遠慮なくどうぞ。
↓ tomonokai@ajimarikan.com

随想 あじまりかんの肝

神仏の祀りと先祖供養について

今回の「あじまりかんの肝」は、神仏の祀り方と先祖供養についてお話しします。

☆神仏の祀り方について

神仏をお祀りするとはどういうことか？

これは分かるようではないことです。

その最大の理由は、神仏が目に見えない存在であるからということ。神仏と言わずとも「霊」と言えは分るでしょうか？ 霊は目に見えない存在です。

さらに、難しい問題があります。神仏と一言で言っ

てしまえば、神も仏も一緒いっしょくたになってしまいます。神と仏はどこが違うのでしょうか？ 神棚と仏壇の違いとは一体何なのでしょうか？

以上のような問題を、一個づつ順番に整理していきましょう。

・神とは

「神」とは、肉体の人間から見て上位の存在であり、指導原理（＝ガイド）と呼ぶべき存在です。

守護霊、守護神（正守護神、副守護神の区別があります）と呼ばれる神霊です。産土神、神社のご祭神も含まれます。

これらの神霊は、必要があれば、家の神棚にお祀りすることができま

・神棚の設置方法

自分の家で、これらの神さまを意識してお祀りするには、適切な場所に神棚を設置することになります。

この場合は、神棚の中に適切なご神体をお祀りすることが一般的です。ご神体とは、神社からいただけるお札や、清浄な石、クリスタルや宝石の類などの神霊が寄り付く物もの実じのことです。

実際の祀り方の詳細については、機会を改めてお話しすることになります。（表紙裏の図3を参照）

・仏とは

一般に「仏様」と言えば死者¹¹ご先祖様を意味しています。「仏様」とは我々日本人の習慣的な呼び方で、正しくはご先祖様です。

ただし「仏様」には「ご本尊」という意味があります。ご本尊とは阿弥陀仏、不動明王、大日如来、南無妙法蓮華経、南無阿弥陀仏などの信じる対象のことで、ご先祖とご本尊をちゃんと区別する必要があります。

ご本尊の場合、魂が入っていれば、拝む人を守って下さいますが、魂が入っていない場合は効果は期待できません。他家の仏壇を見た訳ではないのでよく分かりませんが、我が家の場合、南無阿弥陀仏なので阿弥陀仏の西方浄土からの光が届くようですが、あまり明るくはありません。ご先祖の霊から出ている光の方が明るく元気があるように感じます。

・仏壇には霊が集まってくる

これはあくまでも一般的な話ですが、仏壇にはご本尊・ご先祖の二種類の霊的存在をお祀りしているわけ

です。浄土真宗のような宗派では（南無）阿弥陀仏というご本尊しか祀らない（位牌は置かない）形式もありますが、霊的にはご先祖とご本尊の二種類が出てきます。実体は主としてご先祖が出てきますので、注意が必要です。（表紙裏の図4を参照）

とにかく無数の先祖や縁者の霊が仏壇には登場します。そのことを先ず感じるべきです。仮に感じられなくても、観じる（イメージする）ことが必要となります。

・迷っている霊を供養する

ここから、いよいよ本題に入っていきます。

いわゆる「迷っている霊」、低い幽界から上の世界に上がっていけない霊がいる場合、自然の流れとして子孫に頼ったり、マイナスのエネルギーが子孫に悪影響を与えたりすることがあります。このような場合、ご先祖や有縁の霊が結果的に子孫の足を引っ張ることになります。

これは、悪意から子孫に祟るといったことではなく、子孫に頼ってしまい、供養してほしい、つまり、上の世界に上げてほしいので、念が障りとなってしまうの

です。頼られる子孫の方は、ご先祖のカルマをも浄化するという責任を負ってしまうのです。

頼られる子孫の側に霊力があれば、問題なく浄まってしまうのですが、霊力がない場合いつまで経っても、訳の分からない病気になったりして何をやっても治らないといった現象になります。

ご先祖に頼られている場合には、供養しなければなりません。これにはコツがあります。実際に霊を前に呼び出して対面することが大切です。そうしないと、こちらからの供養の念が届きません。ちゃんと対面できさえすれば、供養の念は確実に届きます。

・「あじまりかん」で霊は昇天する

霊と対面できているという前提で、**宇宙一効果のある祈り言葉が「あじまりかん」**です。親神さまが保証されていますが、必ず救っていただけます。その結果、今まで子孫を頼っていたご先祖が本当の意味での守護神となつて下さいませ。

不成仏霊の問題を抱えている（かも知れない）と思われる方は、この記事で説明した方法で真剣に「あじまりかん」を唱えて下さい。

いつまで唱えるかは自然に分かります。不成仏霊が成仏（神上がり）された場合は、仏壇の中が何とはなしに明るく暖かくなつたように感じられ、ふわっとした感じの気が流れ出ます。例えば、お線香の煙が自分の方にスーッと流れてきたら、ご先祖の感謝の念が出ているということになります。霊風が流れ出すこともあります。その感じは何となく分かりますので、真剣に行じて下さい。必ず結果が出ます。

付け加えますが、ご先祖への感謝の念を示すために、きれいなお水やお菓子・ご飯をさしあげて下さい。このように感謝を形に表すことで、霊的な存在に対して供養の念がしっかり届くことになります。

我が家の例ですが、仏壇で「あじまりかん」を唱えると、ご先祖がズラリと参集され、感謝と喜びの念がウワーツと流れてきます。このような体験は、「あじまりかん」を知る以前にはなかったことです。毎日「あじまりかん」を仏壇で唱えましょう。あるいは、普段からご先祖を意識して「あじまりかん」を唱えましょう。

当会への入会について

・あじまりかん通信の配布方法について

機関誌「あじまりかん通信」創刊号は、特に無料でダウンロードしたり、ご縁のある方にさしあげたりしてきました。おかげさまでとても好評で、さしあげた方には喜んでいただいています。

第二号以降に関しては、当会会員への配布用とさせていただきます。

・会員募集の開始について

それに伴い、あじまりかん友の会の会員募集を開始いたします。

当会を次のような会員制といたします。入会金は不要です。学生会員以外は、法人でも入会可能です。

普通会員…年会費六千円

どなたでも普通会員になれます。

学生会員…年会費三千円

学生証の写しをご提出下さい。

維持会員…年会費一万円

当会の維持に寄与されたい方。

賛助会員…年会費二万円以上

当会の活動に資金面でご協力いただける方。

会員になっていただくと、以下のような特典があります。

・機関誌の隔月配布（年間六回）

・メールによる相談権

・会員専用ホームページへのアクセス権

・あじまりかんソフトの霊的受信権

今後とも「あじまりかん友の会」をよろしくお願いたします。

2018年2月吉日 斎藤敏一、拝

あじまりかん講座のご案内

あじまりかん講座はその名前の通り、『あじまりかんの法則』や『アジマリカンの降臨』の読者の方たちが、自信を持って「あじまりかん人生」を歩んで行かれるために必要な情報を、著者から直接お届けすることを目的としています。

2017年12月以降、月一回のペースで「あじまりかん講座」を開催しています。開催スケジュールはあじまりかん友の会のホームページで決定次第発表します。また、メールマガジンでもご案内します。

当面の開催地は次のようになります。

- ・偶数月……地元、神奈川県相模原市で開催します。
- ・奇数月……関東以外の地方で開催を予定しています。

「来てほしい」という声を届けてください。

早期開催が可能です。

2018年2月25日(日) … 相模大野講座 (9:00 ~ 13:00)
場 所…ユニコムプラザ相模原ミーティングルーム4
定 員…30名

2018年3月3日(土) … 神戸三宮地方講座 (13:00 ~

17:00)

場 所…三宮コンベンションセンター会議室 506
内 容…相模大野2月講座と同様
定 員…30名

2018年5月12日(土) … 高松地方講座 (13:00 ~ 17:00)
場 所…高松市サンポートホール高松 63会議室
内 容…相模大野4月講座と同様
定 員…30名

あじまりかん講座に関する詳細や参加申し込みは、あじまりかん友の会ホームページよりどうぞ。

「スケジュール(2018)」<https://ajimariikan.com/schedule_2017_2018/>

地方講座に関しては、声を上げていただければ優先的に開催を検討いたします。

編集後記

我が家では四匹の猫を飼っている。どの猫も悲惨な生い立ちで、危うく死の寸前で保護された猫たちばかりである。すべて、最寄り駅である相模大野駅の里親募集会場で引き取った猫たちである。

一月も残り二日となった夜のこと、我が家の愛猫のナナ（♀、白、十二歳）が突然亡くなった。息子が自分の部屋のベッドの上で動かなくなっているナナを見つけたのだ。亡くなったばかりで身体はまだ温かかった。一日中元気に普段と変わりなく動き回っていたので、その突然の死には、家族が一様に驚き、悲しい想いをしたものだ。

ナナは他の三匹とは一風変わった個性的な猫だった。なくて七癖などという言葉があるが、その名前のように変わった癖があった。癖といっても、手で水をすくって飲んだり、呼ぶと「ニヤニヤ」と返事したり、お腹が空くと私の膝に手をかけてご飯をせがむといった可愛いものだった。だが、一つ困った癖があった。それは、三年ぐらい前から、トイレ以外のところでウンチをするというものだった。この癖だけは最後まで続いたのだが、その意味が何となく分かったのだ。亡くなった日の夜中のことだ。ナナの遺骸を自分の枕元に置いて添い寝してあげた時に、ナナが

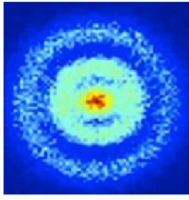
夢に出てきた。「私のことを祈ってお浄めしてほしい」と伝えてきたのだ。そう、猫にも魂があつて、死んだ後にメッセージを送ることができるのである。

たかが一匹の猫とは言え、どうしてどうして、魂の修行をするために我が家にやって来たのだとしか考えられないのだ。火葬をするまでに三夜を過ごしたので、その間ずっとナナの魂は私の霊体の中でみっちり修行をして、旅立って行ったのである。何か大きなカルマをしょって、その死によってようやく解消できたようなのだ。最後の晩などは、私の意識がナナの想念でどこかに持つて行かれそうになったので、慌てて真剣に「あじまりかん」を数百回唱えたぐらい、すごい何かをしょっていた様子であった。

このように、猫でも、その一生をかけて霊的な浄化のために一生懸命修行をするのである。霊的修行という意味では、ナナは十二年間の猫生で、そこいらの並の人間以上の修行を積んだのかも知れない。その意味では、ナナは幸せな猫だったと言える。その証拠に、死に顔は安らかで眠るがごとき表情だったことが、ナナの猫生が何よりも幸せなものだったことを物語っている。

浄化された愛猫ナナは我が家の守護猫霊となつて、今も私たちのそばで遊んでいるような気がするのだ。数日経過した今でも、撫でてあげられるぐらい近くに白猫ナナの霊を感じるのである。（2018年2月3日、斎藤記）

中心あり



原子



渦潮



台風



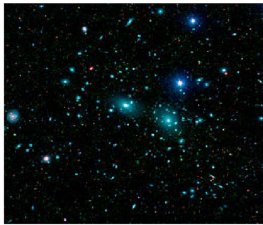
地球



太陽系



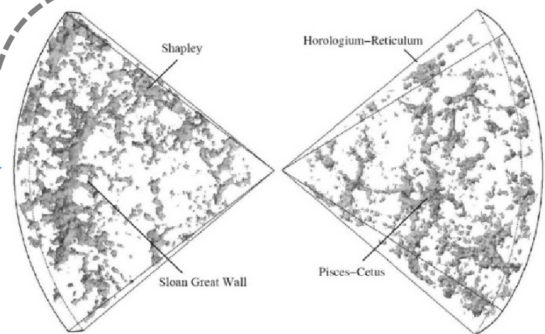
銀河



銀河団



グレート・ウォール(三次元世界に中心なし)



「あじまりかん」する宇宙：『アジマリカンの降臨』P.571より

【解説】『あじまりかん』するとは、中心帰一しているという意味。宇宙では、上図のような渦巻き構造が最も安定した運動系の形態として観測される。渦巻き構造は矢印の方向にスケールアップする。現在の物理学では宇宙の中心は認識できない。宇宙の中心は見えない世界（＝別次元）に存在するのかも知れない。「あじまりかんの渦」とは、神界の中心から常に放射されている大元霊の産霊（むすび）の波動エネルギーが渦巻いているところから命名された。あじまりかんの渦の中心は、この物質宇宙よりも遥かに広大な神霊の次元に存在している。そのエネルギーは、ただ一言「あじまりかん！」を発することで、最高神界から物質世界まで降りてくるのだ。そのことを可能にするのが日本語の言霊の働きなのである。「あじまりかん」という言葉は日本語であるからこそ効果があるのだ。



相模国一の宮寒川神社（神奈川県高座郡寒川町）：寒川比古命＝大山祇神らしい

◎相模大野講座

2018年2月25日(日)9:00～13:00
ユニコムプラザさがみはらミーティング
グループ4

◎神戸三宮地方講座

2018年3月3日(土)13:00～17:00
三宮コンベンションセンター会議室 506

◎相模大野講座

2018年4月15日(日)9:00～13:00
ユニコムプラザさがみはらミーティング
グループ4

◎高松地方講座

2018年5月12日(土)13:00～17:00
高松市サンポートホール高松 63会議室

詳細は友の会ホームページをご覧ください。

← ← ←

https://ajimarikan.com/schedule_2017_2018/

発行人：斎藤敏一／あじまりかん友の会 あじまりかん通信編集部

印刷所：銀河書籍

発行所：あじまりかん友の会

〒252-0333 神奈川県相模原市南区東大沼 4-11-10

Tel/Fax: 042-712-3004

Mail: tomonokai@ajimarikan.com